

| | |
|------------------|---|
| Title | 戦後日本の音楽文化とスクールオーケストラに関する一考察： 高度経済成長期における3校の事例を通して |
| Sub Title | Music culture and school orchestra after World War II in Japan : focusing on three junior high schools of high economic growth |
| Author | 本間, 千尋(Honma, Chihiro) |
| Publisher | 慶應義塾経済学会 |
| Publication year | 2019 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Mita journal of economics). Vol.111, No.4 (2019. 1) ,p.521(149)- 548(176) |
| JaLC DOI | 10.14991/001.20190101-0149 |
| Abstract | |
| Notes | 研究ノート |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20190101-0149 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

研究ノート

戦後日本の音楽文化とスクールオーケストラに 関する一考察

——高度経済成長期における 3 校の事例を通して——

本間千尋*

（初稿受付 2018 年 9 月 25 日，査読を経て掲載決定 2018 年 12 月 12 日）

1. はじめに

現在日本には、プロフェッショナルあるいはアマチュアとされる多数のオーケストラが存在している。こうしたオーケストラの活動は今や活況を呈しているものの、プロオーケストラは主に大都市に偏在し、演奏会は東京に集中している。

一方地域社会と深く結びつき、その地方の音楽文化を支える存在になっているのは、市民オーケストラなどのアマチュアオーケストラである。そのメンバーは青少年から高齢者までの幅広い年代にわたり、それは戦後日本の学校教育における器楽教育の進展がもたらしたものと考えられる。とりわけ学校現場で

実践された課外活動⁽¹⁾としての吹奏楽、特に管弦楽（スクールオーケストラ）の活動は、アマチュアオーケストラ、中でも市民オーケストラに大きく貢献してきたと考えられる。

先行研究では学校現場における吹奏楽に関しては研究も蓄積されているが⁽²⁾、スクールオーケストラに関する研究は少ない。小山裕之は、1994（平 6）年から 2013（平 25）まで自らが行った高校、大学でのオーケストラ創設に関する実践内容を報告しているが⁽³⁾、スクールオーケストラの初期の活動実態はほとんど明らかにされていないのが現状である。

本稿は、日本の器楽教育の導入期とも言える高度経済成長期のスクールオーケストラを取り上げる。高度経済成長期のスクールオーケストラ界で優れた演奏活動を実践した銚子

* 慶應義塾大学理工学部

(1) 教育課程外の活動，部活動である。

(2) 戸ノ下達也編，2013『日本の吹奏楽史 1869–2000』青弓社，山口常光編，1971『目で見える吹奏楽百年史』戸楽会など。

(3) 小山裕之，2014「スクールオーケストラ創設の実際」『鎌倉女子大学紀要』No. 21，101–112。

市立第五中学校、郡山市立第二中学校、習志野市立第一中学校を事例として、戦後日本におけるスクールオーケストラの初期の動向を捉え、その活動を多側面から考察する。この3校は、本格的なスクールオーケストラの草分け的存在として、戦後のスクールオーケストラを牽引していた。高度経済成長期とはいえ、それほど豊かではなかった時代に、なぜ経費がかかるオーケストラを取り入れたのか、教師と生徒たちがどのような状況の下で活動していたのかを具体的に捉え、各中学校の特質を明らかにする。さらにこの時期のスクールオーケストラが、地域社会や日本の音楽文化において担った役割を明らかにする。本稿では資料の検討に加え、銚子五中の指導者・塚本卯太郎氏（1915-2000）の甥松崎晴行氏と、実際に指導を行っていた郡山二中・阿部信幸氏（1938-）、習志野一中・石橋征次氏（1943-）、及び当時の関係者にインタビューを行った。⁽⁴⁾

2. 戦後日本の音楽教育とスクールオーケストラ

2-1 器楽教育の推進

日本の近代学校教育における音楽教育は、戦前は「唱歌」を中心としたが、戦後は器楽教育の分野が発展した。1947（昭22）年に公表された第一次『学習指導要領（試案）』⁽⁵⁾では、「鑑賞」「歌唱」「器楽演奏」「創作（作曲）」などの領域を総合的に学習することが教育目

的とされた。民間の楽器メーカーであるヤマハは、こうした音楽教育の目標にいち早く反応して器楽教育指導講師団を編成し、それはその後学校外教育の場である「ヤマハ音楽教室」の創設に連なり、音楽リテラシーやピアノの演奏技術などの音楽教育を実践した。

一方学校教育現場では、試案の目標の一つである「音楽における表現力を養う（歌うことと楽器を弾くこと）」という提言の下、歌唱だけではなく「ぜひ器楽や更に進んでは作曲もやらなければならない」として、器楽教育が導入された。またこの試案では、現状での器楽教育は大きな困難を伴うのは明らかだが「これを打開して器楽教育も全面的に実施できるように努力したい」、とその取り組みが示された。

1951（昭26）年の学習指導要領では、小学校は1学年からタンブリンなどのリズム楽器やハーモニカなどの簡易楽器を用いた器楽教育が推奨された。中学校の音楽教育は「各種楽器の簡単な編成による合奏や吹奏楽の合奏」、「学校や地域社会で公開演奏または、演奏行進を行う」、「オーケストラや吹奏楽に用いる主な楽器の構造……を理解する」など、具体的な目標が掲げられた。しかしながら1958（昭33）年の中学校学習指導要領は、「音楽によって表現ができる能力を伸ばす」に留まった。吹奏楽やオーケストラの指導は、授業の器楽教育では困難だったと推測される。

(4) 阿部氏は2017年9月17日（口述筆記）、石橋氏は2017年9月14日、松崎氏は2017年11月12日（両氏は録音）に行った。

(5) 学習指導要領はすべて、学習指導要領データベース、<https://www.nier.go.jp/guideline>（2017/12/8）を参照・引用した。

授業では後退した感がある器楽教育であるが、1950年代より課外活動としての吹奏楽やリード合奏⁽⁶⁾への関心が高まり、特に吹奏楽は普及した。吹奏楽の楽器はオーケストラに不可欠な弦楽器より技術習得が容易で、学校の運動行事や社会的行事の参加機会が多いこと、そして何よりもオーケストラより経費が安価であることなど課外活動としての利点が多かった。都賀城太郎によると、吹奏楽は1946(昭21)年2月には大阪で全関西吹奏楽演奏会が開催され、さらに翌年4月から新学制が施行されると、義務教育である新制中学校にもバンドができ始めていた。朝鮮戦争の勃発で戦後日本の経済復興が本格化したことも、学校が吹奏楽部を持つ追い風になった⁽⁷⁾。

このように吹奏楽は戦後直ぐに学校現場で活動が推進された。ただオーケストラを実践した学校も無かったわけではない。それは1953(昭28)年に独唱、独奏部門で開始された「TBS こども音楽コンクール」に、翌年から合奏・合唱部門も加わったことや、1932(昭7)年に児童唱歌コンクールとして始まった「NHK 全国学校音楽コンクール」に、1962(昭37)年から合奏部門が新設されたことから推測できる。『かがやく瞳たち、そして音楽』⁽⁸⁾には、TBS こども音楽コンクールのアナウンサーを務めた山本文郎⁽⁹⁾の1960(昭35)年当時の思い出として、「銚子五中のオーケストラは当時で

も100人近いフルオーケストラで、その演奏を聴いた時に驚いた」と記されている。

山本が語った当時の銚子五中の指導者塚本 卯太郎は、1968(昭43)年以降、雑誌『教育音楽』⁽¹⁰⁾に自校の活動について度々寄稿している。また1977(昭52)年の同雑誌7、8月号では、スクールオーケストラの指導について塚本卯太郎、阿部信幸、石橋征次の各氏が座談を行っている。こうしたことから本稿で事例とした3校の指導者は、当時のスクールオーケストラ活動に大きな影響力を持っていたと考えられる。

2-2 オーケストラ選択の背景

銚子五中の指導者塚本は、東洋音楽学校(現東京音楽大学)に進学し、管弦楽部でバイオリンを専攻した。卒業後は東京でオーケストラに入るつもりだったが戦後銚子に帰り、生家の学区内にある五中の教師となった。1953(昭28)年、公開研究発表会が同校で開催された際に行った合奏が好評を博し、これが原動力となり1955(昭30)年4月、管弦楽部を創設した。その時の思いを塚本は記している。

太平洋の荒波の中に育った気性の荒い生徒や、文化とほど遠い農村の生徒たち。こういう音楽文化に接する機会の少ない生徒たちに演奏する楽しさと喜びを与え

(6) ハーモニカやアコーディオンなどのリード楽器を編成の中心にした合奏。

(7) 戸ノ下編、前掲書、59-86。

(8) 『かがやく瞳たち、そして音楽——TBS「こども音楽コンクール」50周年記念』TBS ラジオ&コミュニケーションズ、2003。

(9) 山本は1959(昭34)年から1976(昭51)年まで、同コンクールのアナウンサーを務めた。

(10) 日本教育音楽協会編。

ようと考えた。どうせやるなら本格的な楽器を使用しよう。非常な冒険ではあるが、やってできないことはない⁽¹¹⁾と決心し、本格的なオーケストラを目指して創設に踏み切った。

郡山二中の指導者阿部は、福島大学教育学部音楽科・バイオリン専攻卒業である。1966（昭41）年、27歳での二中赴任時には、同校には既に東日本で名が通ったリード合奏部があった。最初阿部は合唱指導をしたが2年後に合奏部の指導依頼があり、管弦楽に編成替えした。40年前阿部は、その時の思いを「合奏音の改善ということが主な理由だ⁽¹²⁾」と述べていた。今回のインタビューでも「これからは本物のオーケストラをやろうと思った。ベートーヴェンやモーツァルトの楽曲、本物のクラシック音楽の音を子どもたちに聞かせたかった。オーケストラの厚みのある音で奏でるクラシック音楽を、子どもたちに体感してもらいたかった。それにはアコーディオンでは無理。そのため完全にオーケストラに切り替えた」と語った。また「クラシック音楽をやりたいので、吹奏楽という発想は無かった。ヤマハから吹奏楽にしたら楽器を提供するという申し出があったが、吹奏楽で本物のクラシック音楽は演奏できないので断った。ヤマハの

商法に利用されるのも嫌だった」とも語った。

塚本の記述及び阿部の語りからは、なぜ吹奏楽ではなくオーケストラなのかという疑問が生じる。吹奏楽では本物のクラシック音楽は演奏できないのか。そこで日本における吹奏楽とオーケストラの歴史を振り返ってみたい。

日本における洋楽受容の歴史は軍楽隊から始まっている。明治維新を契機として新しい音楽の先駆になったのは、陸海軍の洋式軍隊調練の一部としての鼓笛楽⁽¹³⁾であった。江戸末期には訓練に用いられるようになり、維新の頃には金管楽器も加わり、ほとんどの大藩は軍の士気を鼓舞するために洋式の軍楽を訓練に取り入れていた。軍楽隊はその後吹奏楽を形成し、軍隊の儀礼や統率、国民統合の意識形成のために用いられるようになった。

吹奏楽は教育現場においても実践された。1884（明17）年、高知県の海南学校（現県立高知小津高等学校）で軍事教練のためにフランス軍式生徒喇叭隊が結成されて以来、各地の小学校、中学校、女学校に音楽隊としての吹奏楽が誕生し、明治期においても40団体前後が設立されていた⁽¹⁴⁾。また明治30年代末から大正年間にかけて百貨店が結成した少年音楽隊⁽¹⁵⁾は、本来は西洋のハイカラな消費生活を提供し、顧客誘引や店内のムードづくりを目

(11) 塚本外太郎、1992「銚子市立第五中学校音楽クラブの思い出」、安藤操・永澤謹吾・地域文化研究会編、『銚子の昭和史』千秋社、147。

(12) 『教育音楽』1977b、21（7）、87。

(13) 横笛・小太鼓・大太鼓から成る簡単な軍楽。

(14) 戸ノ下編、前掲書、62-63。

(15) 「三越少年音楽隊」、「いとう呉服店少年音楽隊」（現松坂屋、東京フィルハーモニー管弦楽団に発展）、「白木屋少女音楽隊」、「宝塚唱歌隊」など。

的としたが、日清戦争前後には戦勝祝賀会などを⁽¹⁶⁾行った。1935（昭10）年の第三回音楽週間では、国体観念強化のために音楽行進とブラスバンドコンクールが開催され、日本教育音楽協会会長の乗杉嘉壽は「ブラスバンド及ラッパ鼓隊は将来諸学校及び青少年団に於ても益々旺んにしたい」と述べた。⁽¹⁷⁾吹奏楽は少年音楽隊のように企業宣伝も行ったが、主に日本が帝国主義化を進めていく中で国民の士気を高めるために重用された。それゆえ一般の人々も演奏に触れる機会があり、比較的身近な西洋音楽だった。

一方日本におけるオーケストラの歴史は、1879（明12）年に「音楽取調掛」⁽¹⁸⁾が創設されてからである。専門的な演奏者育成は主に東京音楽学校で行われ、明治期後半には管弦楽曲、交響曲も演奏可能になり、奏楽堂での演奏会は一般にも公開された。またドイツ留学から戻った山田耕筰は、1915（大4）年、財界人が設立した「東京フィルハーモニー協会」を母体としたオーケストラを創った。これが日本最初の本格的なオーケストラであると言われる。

蓄音器の普及前であるこの時代、オーケストラを聴くには時間と場所を演奏家と共有す

ることが不可欠であり、演奏会に集うのは学生などを含む当時の特権的階級の人々だった。その後蓄音器が普及すると、クラシック音楽のレコード販売数は愛好家の増加に伴い非常に伸び、1930年代中盤には交響曲やソナタのレコード売り上げは日本が世界一になった。こうしたクラシック音楽のレコードは管弦楽、すなわちオーケストラのものであり、その愛好者層は旧制高校や大学生などの学生が中心であった。昭和戦前期はドイツから輸入された「教養」概念が大学や旧制高校を支配していた時代で、ドイツ的教養主義に傾倒した学生たちは日常的に西洋の学術に親しむ結果、オーケストラで演奏される西洋音楽に憧れを持つようになっていた。また戦前の音楽評論家は音楽学校以外の大学出身者が多く、彼らは自身が持つ西洋文化の知識を基に、精神性を重視して楽曲解説や音楽評論を行った。⁽¹⁹⁾

日本人にとって吹奏楽は軍楽として人々を統率する音楽であったが、オーケストラは高等教育機関で学んだ人々に支えられた憧れの⁽²⁰⁾西欧文明の象徴だったのである。日本のオーケストラは演奏者も愛好家も、主に高等教育機関で学ぶ人たちに支えられた「知」や「教養」の一形式⁽²¹⁾として捉えられ、「高級文化」

(16) 三枝まり、2013「多様化する吹奏楽 三越少年音楽隊の活動と新たな音楽文化の形成」、戸ノ下編、前掲書、27-54。

(17) 上田誠二、2013「精神生活への『社会政策』としての吹奏楽の誕生」、戸ノ下編、前掲書、124-153。

(18) 後の東京音楽学校、現東京芸術大学。

(19) 筆者は、2013年7月『三田学会雑誌』（106巻2号）、研究ノート「戦後日本におけるクラシック音楽に関する研究——文化資本としてのクラシック音楽と近代的聴衆の崩壊」において、戦前の高等教育機関の学生のオーケストラ愛好について明らかにした。

(20) 戦時下にオーケストラが国策宣伝の役割を担うこともあった。詳細は戸ノ下編、前掲書、渡辺裕・増田聡ほか、2005『クラシック音楽の政治学』青弓社、などを参照のこと。

としての地位を獲得した。

次に両者がオーケストラを選択した背景を検討したい。松崎氏によると、塚本の生家は代々銭湯を営んでいたが父親はヤマサ醤油に勤務し、経済的に恵まれていた。家には父親が好きな民謡や浪花節などのSPレコードと、ゼンマイ式や朝顔型スピーカーの蓄音機が数台あった。クラシック音楽のレコードがあったかは不明である。塚本の伯母は東京の米問屋に嫁ぎ、叔父もその米問屋で働いていた。叔父は戦前既にバイオリンを所有し、帰省時には弾いていたという。塚本はそうした影響で東洋音楽学校に進学したようだ。

一方阿部は「兄2人は優秀で東北大学に進学したんです。子どもの頃お腹がすいたと母親に言うと、『食事の時間まで音楽を聴いてお腹をいっぱいにしなさい』と言って、ラジオをかけてくれた。そこでクラシック音楽を聴いて好きになり、特にチャイコフスキーのバイオリン協奏曲が好きだった」と語った。高校の頃は市民オーケストラに入りクラリネットを担当し、高校の終わり頃からはバイオリンもやったという。安積高校卒業後は地元の銀行に就職する予定だったが、知り合いの音楽教師からピアノの特訓を受け、福島大学に進学した。

両者の家庭は戦前から戦後にかけての地方社会において、一定の文化資本と経済資本に恵まれていた。そうした家庭ではラジオやレ

コードにおいて、オーケストラの楽曲に触れる機会が多かったのだろう。両者のハビトゥスが、迷わずオーケストラを選ばせたと考えられる。そこには日本の西洋音楽受容の歩みと、オーケストラこそが本物のクラシック音楽と捉える、個人的選好を超えた西欧文明に対する日本人の憧れが潜在していることが否めない。

塚本、阿部が自らの意志でオーケストラ活動を始めたことに対し、習志野一中の石橋は「やらされた」という感が強く、自らオーケストラを選択したわけではない。石橋は武蔵野音楽大学声楽科卒業で、1966(昭41)年、23歳での一中赴任時には既に管弦楽部は存在していた。千葉県音楽教育指導者であった千葉大学教育学部教授石黒一郎に、同校のオーケストラ指導を託されたのがオーケストラとの関わりの始まりである。習志野一中は、前身である津田沼第一中学校が1949(昭24)年に開校し、翌年には弦楽器を含めたリードオーケストラが誕生していた。いち早くリードオーケストラが誕生した背景には、戦前からの習志野市の歴史が影響していると推測される。

習志野市は戦前、陸軍の軍郷であった。大正期における第一次世界大戦時の日独戦争時には「ドイツ兵俘虜収容所」が存在し、ドイツ人捕虜の音楽家ハンス・ミリエスによる習志野捕虜オーケストラが編成されていた。「美しき青きドナウ」などが演奏され、周辺住民も演奏会を聴いていた。収容所の中ではイプセン

(21) 若林幹夫、2005「距離と反復 クラシック音楽の生態学」、渡辺裕・増田聡ほか、前掲書、219。

(22) 1947年創立の津田沼町立津田沼中学校は、2年後の8月に津田沼第一中学校と津田沼第二中学校に分離。

の演劇が上演される他、サッカー、テニス、ドイツ体操なども行われていた。ドイツ人捕虜と当時の習志野の人々との交流もあり、ドイツ兵の洗濯の手伝いに通った人やソーセージの作り方を伝授された人もいた。また解放後も日本に留まったドイツ兵もいた⁽²³⁾。習志野市は、日本人の憧れの象徴だった西欧文明を身近に感じられる地だったのである。こうした経緯から習志野の人々は、吹奏楽よりもオーケストラの方に親和的だったものと考えられる。

3. 各校の実態調査

3-1 各中学校の背景

銚子五中

銚子市は古くから漁業と醤油産業で栄え、1933（昭8）年、千葉市に次いで県内2番目の市制施行がなされた。銚子町と本銚子とに区別された明治期の銚子市は、1907（明40）年発行の『文芸倶楽部』に「銚子町は商業地として商売軒を並べ、町も相当に綺麗でして、東京の場末くらの体裁を備えて居ります、本銚子と来ては純粹の漁業場のこととて町は穢ない、臭気は非道い、男も女も洗足の儘……日本にも此の如き所が有るものかなと驚きました」と記されるような状況だった⁽²⁴⁾。またJR総武本線、最終「銚子駅」の一つ手前「松岸

駅」近隣の松岸地区は、江戸時代から1941（昭16）年頃まで遊郭として栄え、芸娼妓は銚子の貧しい農漁業家や職人の娘が多かった⁽²⁶⁾。

銚子市は1947（昭22）年に新制中学校5校（一中～五中）を開校した。五中学区は市の中心部（旧銚子町）の西、かつて花街があった「松岸駅」を中心とした利根川沿いに広がる地域で、1937（昭12）年に銚子市に編入した戦前の海上村が多くを占めた。市史によると、同市では新学制発足当初から家庭の無理解と経済的理由から中学校で生徒の長欠問題が発生した。1953（昭28）年当時、漁業従事者が多い一中、二中、五中は2週間以上連続の長欠生徒が多く、長欠問題が下火になるのは、高度経済成長期に入った昭和30年代半ばであった⁽²⁷⁾。1955-1975（昭30-50）年にかけての市の人口推移は、国勢調査によると減少傾向ではあったが9万人台を維持していた⁽²⁸⁾。

銚子五中の管弦楽部は、1960（昭35）年頃からTBS子ども音楽コンクール関東大会一位の常連で、NHK全国学校音楽コンクール合奏の部では1966-1971（昭41-46）年まで関東甲信越地方代表校であり、1967（昭42）年からは全国大会の優勝校でもある。優秀な管弦楽部を持つ中学校ではあったが塚本は、「本校は銚子市の西部にあり、校舎は木造二階建てのみすぼらしい学校で、生徒数は850名。

(23) 習志野市教育委員会編、2001『ドイツ兵士の見たニッポン』丸善。

(24) 市の中央が銚子町、本銚子は市の北東部に位置する。

(25) 島田隆編、1956『銚子市史』、650-651。

(26) 同上、545-550。

(27) 銚子市編、1983『続銚子市史II』、461-484。

(28) 以降、人口はすべて国勢調査に依る。

(29) 同コンクールでは、関東大会一位連続10回、全国大会一位連続6回。

父兄は農業、漁業、商業、工員が多く市の中央部より文化的水準が低く、音楽より珠算⁽³⁰⁾「下のすぐ下がシであることすらわかっていない生徒がいる。家庭において音楽的雰囲気は薄く、音楽軽視感が強い。社会的に地域全般の音楽⁽³¹⁾に対する関心が薄い」と記している。

高度経済成長期の五中地区が音楽とは無縁の環境であったことは、郡山二中の阿部が「昭和40年代中頃に銚子五中の練習を見学に行ったことがあるが、五中は音楽をやれる環境ではないと思った」と述懐したことからも推測できる。こうした環境の生徒たちが、やってできないことはないとは本格的なオーケストラを目指した塚本の下で活動を始めた。ほとんどの生徒は楽器経験がなかったが、五中と一部学区が重なる本城小学校⁽³²⁾では当時リードオーケストラが盛んで、卒業生が五中で管弦楽部に入部することもあった。1964（昭39）年に五中の一年生部員だったHさんは「五中の管弦楽部はすごいと兄に勧められて入った。コンクールで学校を休んで東京に行けると思った」と入部の動機を語った⁽³³⁾。

郡山二中

郡山市は県庁所在地ではないが東北地方では仙台市に次ぐ経済都市で、明治以降、安積開拓事業の開墾地として急速に発展した。明治後期の人家は主に旧国道筋の大町・中町・本

町の中心街に密集し、大正期になるとこの地域に加え駅前通りも商店街の中心となり、市街地は赤木・清水台・虎丸・麓山に拡大した。1939（昭14）年頃までの産業戸数は、金融恐慌を受けたものの第2次産業、第3次産業は増加した⁽³⁴⁾。

人口は1955（昭30）年には91,119人であったが、高度経済成長期における周辺町村との合併や京浜工業地帯の多数企業の進出により、1975（昭50）年には264,628人へと増加した。郡山市には高度経済成長期以前から音楽活動の下地があった。1949（昭24）年、国鉄郡山工場に男声合唱団が誕生し、合唱団の指揮者鈴木武司は市民に合唱を浸透すべく地域での音楽活動も行っていた。1954（昭29）年には国鉄郡山工場の大食堂で、「NHK交響楽団公演」も開催された。

郡山二中は上述した駅前から広がる市の中心街を学区とし、旧都市中間層と思われる自営業、開業医など比較的富裕層が居住している。1948（昭23）年、郡山市ではそれまで小学校舎の間借であった中学校の校舎建築に迫られ、公立学校建設ではあるが広く市民に寄付を募った。市史からは、その際の一帯当たりの寄付金額が、同学区は他地域に比べ多いことが読み取れる⁽³⁵⁾。また県内トップと言われる県立の安積高校⁽³⁶⁾、安積女子高校への進学率も第一位である。加えて二中と同学区の金

(30) 『教育音楽』1968, 12 (1), 28。

(31) 同上, 1976, 20 (10), 22。

(32) 本城小学校は五中と四中へ進学する。四中は旧銚子町に位置し、市内トップの中学校であるため越境入学者が多い。五中学区でも大学進学を希望する生徒は四中へ進学した。

(33) Hさんへのインタビューは電話にて2016年12月20日実施。

(34) 郡山市編, 1971『郡山市史』第5巻近代(下), 78, 276, 300-301。

透小学校は、成隆舎として1873（明6）年に開校し、明治天皇も来校した市内で最も古い小学校で、1895（明28）年制定の校歌「立志」は日本の小学校で最も古い校歌とされる。金透小学校は1961（昭36）年以降、全国大会に多数出場している合奏部を有している。

こうしたことから二中学区の家庭は、クラシック音楽を受け入れやすかったと考えられる。今回阿部は、リード合奏をオーケストラに変えた時の子どもたちの反応として「本物をやってみたくらいという感じだった。アコーディオンはクラシック音楽として世界に通用しないため、子どもたちも喜んでアコーディオンからバイオリンに変わった。子どもの指は柔らかいので、それも可能だった」と語った。阿部に代わったその年に、グリーンカ作曲（ロシア）、歌劇「ルスランとリュドミラ」序曲に取り組み、県大会で吹奏楽を抜いて一位になった。

習志野一中

1954（昭29）年の市制施行により津田沼町から習志野市となったこの地域は、江戸時代は半農半漁の小さな村だったが明治以降軍郷として発展し、終戦後は急速に宅地化が進んだ典型的な首都圏のベッドタウンである。習志野市の初代市長・白鳥義三郎⁽³⁷⁾は、ベルリン工科大学で「都市計画論」を学び大学で教鞭を

とった教育者であった。市史には「行政には素人であったが、学者だけに自治制に対する理解が早く……いかなる事務でも単独で行い強力なリーダーシップを発揮した」と記されている⁽³⁸⁾。現市域には、第二次大戦までは大学などの高等教育機関はもちろん、中学校や高等女学校などの中等教育機関さえなかったが、白鳥は公共施設の建設と広大な旧陸軍の跡地に千葉工業大学、東邦大学、順天堂大学、日大生産工学部などの大学誘致を行い、軍郷から学園都市へという政策下で教育推進を図った。習志野市は軍郷としての広大な跡地が首都圏の増大する高等教育機関のために開かれ、文教都市へと変貌を遂げた⁽³⁹⁾。また1957（昭32）年には人口約34,000人の市に市立高校を設置した。1955-1975（昭30-50）年にかけて、人口は32,198人から117,852人へ増加した。

このような地域において、習志野一中は市内で最も古い中学校である。1950（昭25）年、津田沼第一中学校時代に千葉県初の音楽専攻卒業の校長の下で合奏部が誕生した。これは弦楽器を含むリードオーケストラで、その演奏は翌年にNHKより放送された。そのため習志野一中は、スクールオーケストラ発祥の地と言われている。地元民は同校に対し、部活動が盛んな普通の公立中学校という感想を持っている。

(35) 同上、第6巻現代、1973、182-184。

(36) 安積高校は当初から英語教育のために外国人教師を招聘するなど秀才教育を行い、卒業生には高山樗牛、朝河貫一などがいる。2014年に創立130周年を迎えた（『郡山市史』第4巻近代（上）、503）。現在郡山市の県立高校は男女共学で、安積女子高校は安積黎明高校に改称。

(37) 昭和22年津田沼町長として当選した。

(38) 習志野市教育委員会編、1995『習志野市史』第1巻通史編、965。

(39) 同上、981-984。

石橋は「赴任した時は30人くらいの小編成で、その頃は銚子五中の方が充実したオーケストラ編成だった」と語る。赴任直後、全国学校合奏コンクールにリヴェルリ作曲『キューピーの観兵式』で出場した。

3-2 楽器の購入

銚子五中

創部当初の楽器購入について塚本は、「予算が無いのでドラムペット、クラリネット、トロンボーン、フルートなどの管楽器は一番安いもの。チェロ、コントラバス各一台は市の楽器店から借用、そしてバイオリンは自分が持っていたもの、さらに『個人持ち』を借用して何とか20名くらいの編成にした⁽⁴⁰⁾」と記している。最初はアコーディオンも組み入れた。

松崎氏によると、アコーディオンを弾く氏の父親と塚本は、戦後友人たちと『クリスタル楽団』というバンドを組んでいた。松崎氏の父親は「タンゴやジャズを演奏すると時々謝礼を貰ったが、自分たちは謝礼を貰わなかった。どうも刃太郎さんは、それで五中の楽器を買っていたようだ」と生前笑いながら語っていたという。同学区の本城小合奏部は、指導教師が家庭訪問をして楽器購入を依頼していた。そのためバイオリンは個人所有が多かったが、練習の厳しさから小学校でオーケストラを止める生徒もいた。

当時の教育委員会関係者の遺品に、塚本より贈られた銚子五中のレコードが残されている。

1962（昭37）年4月20日、NHK第二により放送された演奏である。レコードの入った紙袋には、「平素お世話になります。この録音盤は去る三月三十日に放送されたものです。御試聴いただけますれば幸いと思い御届いたします。今後ともよろしく。S様四月二十日 五中塚本」ということばが添えられている。塚本が、自ら教育委員会に支援を願っていたことが窺える。1969（昭44）年、NHK全国学校音楽コンクールの優勝祝いとして市から楽器購入費50万円を贈られた。さらに地元の楽器店からも特別援助が得られ、1本40万円のシュライバーのファゴット、30万円のオーボエを購入した。塚本はその時の喜びを、「名実ともに本格的なオーケストラ編成になった⁽⁴¹⁾」と記している。

郡山二中

阿部は「二中は財源の不自由は無かったが、直ぐにバイオリンを個人で買うわけにはいかないから、最初は鈴木バイオリンと中古バイオリンを購入した。海外から中古バイオリンを取り寄せ修理して使い、弓も中古を吟味して良い物を買った。弓は1本1万5,000円～2万円。バイオリンは1挺2,3万円だった」と語る。チェロは初めから演奏者が個人で購入した。郡山二中のオーケストラは、2,3年後に楽器は個人購入になった。阿部は「二中のオーケストラは、基本的に個人所有の楽器です」と語る。

(40) 塚本、前掲書。

(41) 『教育音楽』1970、14（2）、42。

総勢約 60 名のオーケストラ編成のうち、バイオリンは約 20 名で当初はエレクトーンも使用した。日本一になった 1974 (昭 49) 年に、市がオーボエとファゴットを購入してくれた。ファゴットを持った管弦楽部は、福島県では二中が初めてだった。

習志野一中

習志野一中では個人所有の楽器はなかったと石橋は語る。

「楽器の個人所有は皆無。個人で楽器を買うというのは無かったですね。バイオリン、アコーディオン、オルガンに、チェロは 1, 2 本あったがティンパニは無く、サイズの違う大太鼓を横にして使い、オーボエ、ファゴットも無かったのでエレクトーン、低音はエレクトーンの足。管楽器は日管でクラリネットは木管ではなく⁽⁴²⁾プラ管、バイオリンにビオラの弦を張ってバオラと言いながら使いました。弦はスチールで、ガット弦があるのも知りませんでした」

安い楽器を使っていた一中の管弦楽部を積極的に支援したのは、第 3 代習志野市長、吉野孝⁽⁴³⁾だった。コンクールで成果が出ると予算をつけてくれたため楽器はどんどん充実した。1973 (昭 48) 年、習志野市が『若潮国体ボクシ

ング会場』に決定すると、市長は式典を吹奏楽ではなくオーケストラで行うと決め、約 550 万円の寄付を募ってくれた。カールヘフナーのバイオリンや、チェロ、コントラバスなど主要な楽器はほとんど買い換え、クラリネットが B 管から A 管に変わったのもこの時代だった。ウィーン青少年音楽祭に参加した際にも多くの楽器を買い換えた。市長は石橋の一中在任 13 年の間、応援し続けた。ただそうは言っても管弦楽は経費がかかり、楽譜代捻出を目的とした廃品回収を行った。大型トラックに山積みの廃品を見て業者も驚いたという。

3-3 実技指導と練習

銚子五中

大部分の生徒は全く楽器経験はないが、バイオリンの場合は 2 か月間で弾き方と指の動かし方、ハ長調を全部覚えさせ、その後すぐ合奏の中に入れてしまう。そして中学 3 年の間に、バイオリン教室での 6 年間、またはそれ以上の技術を習得するのが生徒の課題であっ⁽⁴⁴⁾た。新部員は上級生がパート別に指導し、塚本の仕事は「各パート別に練習している場所へ行き、弦楽器ならば音程の悪いところ、運指法ボーイング等について指導し、曲の速いところの音色とリズムが絶対にくるわないよう特に注意し、時にはいっしょにひいて音程の正確を期した⁽⁴⁵⁾」ことだった。

塚本はバイオリンの専門教育を受けている

(42) 日本管楽器株式会社の略で後年ヤマハに吸収された。

(43) 1967 年から 4 期務め、特に子どもたちの音楽活動を支援した。国立音楽大学作曲家卒で社会党員市長。

(44) 『教育音楽』1977b, 21 (7), 89。

ため、弦楽器のボーイングは厳しく注意した。また「中学のオーケストラで耳ざわりなことは、プラスの音がきたないということで、この原因の一つに中・低音の楽器の音色が悪くすっきりしない感じがある」とし、切れの良い澄んだ音を出すようにうるさいほど注意した⁽⁴⁶⁾。さらに管と弦と一緒に演奏すればオーケストラの音だというのではなく、融合された互いの音色が良い音の頂点にいて初めてオーケストラの音になるとして、“オーケストラの音”を創ることを目指した⁽⁴⁷⁾。五中の練習を見学した郡山二中の阿部は、「塚本先生はバイオリンを弾くが、管楽器の指導も徹底していた。管楽器のつば抜きに関して特に注意を払っていた。塚本先生は、本当に底力のある静かな人だった」と述懐した。練習は厳しく「とにかく最初は生徒とけんかである。事実頭痛がしてくる。どなるのでのどがいたくなってくる⁽⁴⁸⁾」と塚本は記している。初めてNHK全国学校音楽コンクール合奏の部で全国優勝した際、3年生の女生徒は次のように記した。

ほかのクラブよりもきびしいように思えた。しかし、誰でも何かを始めようとするときは最初が一番つらいものだということは知っていたのだが、やはりつらかった。先生から「NHKコンクールに出場してみるか」と言われた時、私たち

は、「もちろん出場してみよう」という気持ちでいた……授業が終わりホームルームがすんでから急いで体育館へ行く。先生の方が私たちより早く来てバイオリンの音をあわせていた日もあった……外は五時をすぎるともうまっ暗で何も見えない。学校内は体育館から流れる私たちの演奏する音と運動場で鳴いている犬の声だけになる。みんなを見ると夢中で演奏している。私たちの目と塚本先生の目が合う。そして何度も注意される。先生は自らバイオリンを弾いて教えてくれる。その姿にみんなは視線を向ける。「自分たちもきつとこのようにひくのだ」とでもいうような目でみつめている。寒い日などは手がこおりそうで、自分たちの手が思うように動いてくれない……この練習の積み重ねをNHKコンクールにぶちまけた。その成果はみごと一位。夢にも見ていた第一位の栄冠を私たちの手と先生の手で受けとったのだ⁽⁴⁹⁾。

郡山二中

「二中の技術指導は専門家に依頼していた」と阿部は語る。金透小学校でバイオリン経験がある生徒もいたが、市内のバイオリン講師にボーイングを徹底的に指導してもらった。ただ依頼したのは基礎的技術のみで、楽曲指

(45) 同上, 1968, 12 (1), 27。

(46) 同上, 1968, 12 (1), 28。

(47) 同上, 1977b, 21 (7), 88。

(48) 同上, 1972, 16 (3), 24。

(49) 同上, 1968, 12 (1), 29。

導は阿部が行った。前指導者の教え子たちも高校の帰りに立ち寄り指導を行い、練習時間は年間 800 時間ぐらいになった。阿部は「専門家にするわけではなくスクールオーケストラの場合、バイオリンと音程の問題ばかりに気を取られないことが重要」と語る。当時も「バイオリンの本体や弓を正しく持って、手首をやわらかくして弾く、そういったボーイング関係の指導ができれば、はたで見ると弦の指導は難しくない。もちろん音感が必要だが、指関節の柔らかい子の方が伸びる」と述べている。⁽⁵⁰⁾

習志野一中

オーケストラの指導が初めてだった石橋は、以下のように語った。

「私は歌の方が専門で、オーケストラの楽器のことは全然わかりませんから、見よう見まねでただ気合だけです。教えるというか、一応鈴木メソッドとか NHK のバイオリン教室とか、ああいうのを見ながら理屈だけはしゃべれるようにしましたけど、実際自分が弾けるわけでもないですから。生徒も中学で初めて楽器をやる、または谷津小学校で少し経験、といった普通の家庭の子どもたちで、特別に個人レッスンについていたということは全く無かった。個人レッスンを受けに行くという感覚が無かったですね。

トレーナーが入っていたわけでもあり

ませんから。そういうのがあるということも頭の中になかった。私は音が違う、こんな音でとかこんなイメージでとか、ただそれだけです。子どもたちが考えながら一生懸命それに近づこうとするっていう……」

石橋は生徒と一緒に試行錯誤しながら技術の向上を目指した。当時は塾もなかったため毎日きつい練習を続け、休みは盆と正月の数日くらいだったという。1977（昭 52）年にホルンのソロを担当した 3 年生の女生徒は、自身の思いを以下のように記している。

「セビリアの理髪師」には、わずか 9 小節のホルンのソロがあります。その 9 小節に全能力を注ぎ込むことが私に与えられた義務でした。私はホルンがとても好きです。楽器の形といい、音色といい、心からすばらしい楽器だと思っています。そう思っていればいるほど自分の技術の未熟さにうんざりするのです……録音取り、あるいはステージ演奏の前には必ず先輩方や友だちが、緊張している私に激励の言葉を送ってくださいました。

上手になりたいと思っていました。それは何より私自身のためと、私の味方であるホルンのためと、「セビリアの理髪師」をより良くするためにです。この私の願いとはうらはらに、録音取りをひかえて私は何度も、石橋先生から「最近、不

(50) 同上, 1977b, 21 (7), 89.

調だな」という胸に突き刺さるようなことを指摘されてしまいました……

全国大会は二位でした。その知らせを受けたとき、私は信じられませんでした。決して自分たちの実力には、うぬぼれていたわけではありませんけれども、「二」という数字は、とても軽い感じがしたので。やはり、私たちは、自分たちの努力に対して、「一」という数字を期待していました……私たち3年生は後輩に望みをかけます。それとともに私は自分の知限りのホルンのすばらしさを後輩に引き継いでいきます。それで初めてホルンを手にしてきた私の義務が終わるような気がします⁽⁵¹⁾。

ここにはソロを担当する責任、自らの技術に対する葛藤、仲間との絆、3年生としての義務が示されている。スクールオーケストラ伝統校の生徒として過ごした日々の総括である。

3-4 家庭の反応と学内での視線

銚子五中

管弦楽部の創設時には、塚本が家庭の音楽的雰囲気が薄く音楽軽視感が強いと感じていた五中の父兄は、NHK 全国学校音楽コンクール合奏の部で全国大会最優秀校になった1967（昭42）年頃から、積極的に管弦楽部の支援を始めた。父母会が発足し、金銭的な面でも援助を受けられるようになった。塚本と生徒

たちの姿が、「音楽より珠算」という価値観を持っていた父兄を動かしたことに他ならない。塚本は以下のように記している。

練習で遅くなった女生徒は事故防止のためハイヤーで自宅まで送ってくれるし、学校給食なので生徒たちのおなががすくと思ひ、カステラ工場から74名が満腹になるほどのカステラを届けてくださる方もおり、また8月の合宿には父兄が交代で宿泊しながら世話をしてくれるし、果実、お菓子その他の冷たい飲み物を用意してくれて、どのようなハードトレーニングにも耐えられる素地を作ってくれた⁽⁵²⁾。

また後年、「クラブ顧問として在任中、運営上ありがたかったことは父母がほんとうに心から援助してくれたこと……費用の面でも援助をしてくれた点、その他の面でもよくやってくれた⁽⁵³⁾」と記している。

郡山二中

「二中の親は子どもの教育、音楽に対する理解があり、音楽は人生にプラスになると考えてくれた。二中には、管弦楽部と直接関係が無くても心から応援してくれる父兄や教師、子どもたちがいた」と阿部は語った。地域のバックアップが強かったことは当時も感じていた。

(51) 同上, 1977 a, 21 (3), 30。

(52) 同上, 1970, 14 (2), 45。

(53) 塚本, 前掲書。

学校が一生懸命やれば、その御父兄なり地域の方々が応援してくれるのはどこでも同じだと思いますが、特にオーケストラの場合それが顕著ではなかろうかと思ったわけです。つまり、地方都市の音楽文化活動の中心になりつつあるオーケストラを中学校の中で取上げてくれるということは、非常な親密感というか、親しみを感じるらしく、とにかく援助してやろうというような声が学校関係者外から次々と出てまいりまして……⁽⁵⁴⁾

学内でも管弦楽部に対する見方は暖かく、遠征が終わって帰ってくると全教師が遅くまで待っていてくれた。阿部は「何より嬉しかったのは、音楽をやっていない子でも二中の管弦楽を聴くと二中の生徒であることが誇りに思える、と言ってくれたこと」だと語る。

阿部が最も注意を払ったのは勉強との両立だった。二中は市内トップの進学校であるがゆえに、1クラスで安積高校、安積女子高校に各10名は入学させるノルマのようなものがあった。それゆえ音楽の指導だけではなく、教育目標を持ち集中力の育成に努めた。その結果勉強の基礎力もつき、管弦楽部は成績が落ちないと父兄が認めてくれたという。

習志野一中

習志野一中では1年に2、3度、保護者を対象にクラブの練習風景の参観日を設け、さら

には行事などがあるたびに家庭との連絡を密にした。背景には我が子がひたむきに練習している姿を見てもらいたい、それが生徒たちへの理解と励ましになるはずだ、という石橋の思いがあった。しかしそれも最初は色々な問題があったと石橋は記している。

参観日を設けるについても最初の頃は、いろいろと悩みがあった。まるで苦情賜り教室のようだった。「朝が早すぎる、帰りは暗くならないうちに」「日曜日は家庭の団らんの日ですから練習を休ませてください」とか。ある時は世相を反映してか「受験がありますので」ともきた。しごく当然な話ではある。が、私自身そのような言葉に耳を貸す余裕などまったく持ち合わせていなかった。しかし全国一位獲得後は、苦情の話もなくなり（諦めムードも手伝ってか）、逆に応援してくれるまでになった。⁽⁵⁵⁾

父兄の応援を得られてからも、教頭は冗談交じりに「管弦楽は金がかかるよなー。オケラは金食い虫だ」と言っていたようである。コンクールなどで成績が上がってくると学校内においても部員数が急激に増加し、全国一位獲得後は3年生部員が1月のコンクールまで活動するのも当然と受け止められるようになった。

(54) 『教育音楽』1977b, 21 (7), 87。

(55) 同上, 1977a, 21 (3), 76。

3-5 3人の教師が目指したもの

銚子五中

クラブ創設時に、音楽文化に接する機会の少ない生徒たちに演奏する楽しさと喜びを与えようと考えていた塚本の思いは成果となって表れ、以下のように記すまでになった。

生徒たちも苦しい練習をいやがらずに自分から進んで参加するようになり、だんだんと上達していった……漁業の子供たち、農業の子供たちが都会の子供たちに負けないで見事に演奏するように成長したのである。教える教師と練習する生徒の努力とやりぬく力が実を結んだとき、その効果は素晴らしいものとなって表面⁽⁵⁶⁾に出てくる。

塚本は、生徒が卒業式の当日まで退部すること無く、3年間苦しい努力に耐えて胸を張って校門を出ていく姿を見ると、涙の出るのを禁じ得なかった。そして一つのことを成し遂げた自信が、将来プラスとなって表れると信じた⁽⁵⁷⁾。スクールオーケストラを通して、努力とやり抜く力があれば、地方都市の子どもたちでも、大都会の子どもたちに決して負けないことを、身を持って教えたかったのである。

郡山二中

40年前の対談で阿部は「管弦楽の編成というものは、ヨーロッパの音楽の中で四百年も続いて、非常に普遍性の高い合奏形態である⁽⁵⁸⁾」と述べた。普遍性の高い音楽を子どもたちに与えることが重要だと感じていたのである。阿部は、「学校では本物の楽器を出来るだけ多く取り扱って、生涯を通して音楽をやるのが本当に人生にとって素晴らしいことだということ体を得させたい。それには指関節もまだ柔らかく、大人用の弦楽器を扱える中学校はスクールオーケストラの中心、一番充実する」と考えていた。教育現場ではオーケストラは主にレコード鑑賞であるため、演奏の素晴らしさを実際に体験させるという、音楽教育への憧れを具現化したのである⁽⁵⁹⁾。

阿部は「優れた音楽は優れた指導性を持つ、というのが私の信念だ」と語るように、音楽の持つ教育的価値を信じていた。管弦楽は演奏目標を持つことが重要であり、二中の場合は「二中の音楽を創る」ことだったという。それは自らの精神的指導者である作曲家の陶野重⁽⁶⁰⁾雄（1908-1985）から言われた、「二中の音楽を創りましょう」ということばに由来していた。二中の音楽を創るために阿部は良い曲を選曲し、本気になって練習、演奏することを生徒に説いた。今回のインタビューでは「管弦楽は普遍的な楽器編成を教え、ソナタ形式

(56) 塚本、前掲書。

(57) 『教育音楽』1970、14（2）、44。

(58) 同上、1977b、21（7）、87。

(59) 同上、1977c、21（8）、45。

(60) 陶野は1953年に文部省芸術祭管弦楽部門入選。代表作は吹奏楽曲「若人の踊り」、「祝典音楽」など。

を学ぶことができる。世界の名曲を演奏でき、そうしたことで必ず人は育つ。優れた音楽作品は、それ自体が優れた指導性を持つ。編成さえしっかりしていれば伝統音楽を表現でき、それを子どもたちが聴ける。子どもたちには本物を与えたかった」と語った。

また阿部はオーケストラのよさというものを、後援会の人々にも伝えたいと思っていた。当時の対談では、以下のように述べていた。

いままでの日本の音楽教育というのは“学校音楽校門を出ず”という言葉で表現されてきたわけですけど……学校教育と地域社会の連携というものがほんとに強く叫ばれている時期はいままでなかったと思うのです。そういう中で一番いいのはやっぱり音楽だと思うのです。私は音楽教師というのはもっともっと地域にアピールする、また、学校の音楽というのはこういうようにすばらしいのですよというようなことをもっと強調してもよいと思う⁽⁶¹⁾。

阿部は、二中の校外コンサートなど地域の音楽を啓蒙することも徹底的にやったという。

習志野一中

『未成交響曲』を演奏したいという声が生徒たちから上がっていた。「金食い虫のオケ」として楽譜代くらいは自分たちで何とかしよ

うと、部員一丸となって廃品回収を行い、得た資金を高額な楽譜の購入に充てた。石橋は廃品回収のもう一つの意味として、人様のお宅を訪ね趣旨を話してお願いし、回収までの過程の中で部員一人一人が何かを学んでほしい、と考えていた。協力してくれた方へ礼状を配り、子どもたちの態度が好印象だったと聞くとホッとしたという。後年石橋は、廃品回収にまつわる思いをブログ⁽⁶²⁾に記している。

東大の近くにあるアカデミアで購入。その場で学校に“今、未完成を購入した。学校に戻る”と連絡した。夕方学校につくと部員たちは帰らないで音楽室で待っていた。下校時間はとくに過ぎている……。音楽室にいくと“楽譜を見せてください”と奪うように持って行った一年生の部員。その部員が指揮台に立ち、“今から楽譜を配ります”と言って新品の『未成交響曲』のパート譜を配りだした。“それでは初見大会をやります。頭はコントラバスとチェロ、いいですか……”と言いながら指揮を始めてしまった。冒頭のメロディーが聞こえてきた途端、“オー”という声が沸いてきた。

この廃品回収は長年続けることになり、地域の名物になったという。また石橋は部活動と勉強の両立で悩む生徒たちに向け、「苦しい時こそ仲間と頑張ろう……逆境に打ち勝つ

(61) 『教育音楽』1977c, 21 (8), 43-44。

(62) <http://www.jijiongaku.com/E/newpage4.html> (2017/10/5)

強い精神力。仲間と一緒に支え合う強い絆。二度とない青春を無駄にするまい」とブログに記している。これらの経験が長い人生で絶対に役立つと確信していた。石橋は「頑張ろうと熱く語っても苦しさに涙する3年生と一緒に泣いたこともあった」と語る⁽⁶³⁾。オーケストラ活動を通して様々なことを学んで欲しいというのが、石橋の教師としての一番の願いだった。

3-6 生徒たちの進路

郡山二中

管弦楽部には「音大の付属高校からスカウトが来ることも珍しくなかった」と阿部は語る。そのまま音楽大学へ進み、プロの音楽家になった者も少なくない。また市民オケの半数くらいは、二中の生徒や卒業生だという。

習志野一中

中学を卒業して管弦楽部を去ることに対しある女生徒は、「これから私達は卒業し、新しい生活へ入っていきます。でも、私はこのバイオリンを離す気はありません。数多くの思い出を秘めたこのバイオリンを⁽⁶⁴⁾」と述べている。こうした生徒の思いは、地域の音楽文化を支えることにもなる。

習志野市では小・中学校でオーケストラをやった子どもたちの受け皿として、一中が全国合奏コンクール県大会優秀賞を受賞した翌年の1970（昭45）年、市民オーケストラ「習

志野フィルハーモニー」を作った。小・中・高校・一般という道筋を用意し、地域の音楽文化向上に繋げたいという狙いがあったからだ。しかしながら習志野市にはオーケストラ活動をしている高校が無く、卒業生の中には一中で卒業生の室内楽、弦楽合奏、木管合奏を創るか、在校生の演奏旅行に同行して演奏する者もいたという。

一方石橋は「教え子たちの他市への移動が結構あるんです」と、以下のように語る。

「習志野の次に今オーケストラが盛んなのは船橋なんです。船橋に火をつけたのは習志野です。向こうは小中学校合わせて90校くらいある。習志野は20校くらいしかありませんから、私の教え子が船橋に行ってオーケストラを始めて、習志野に追いつけ追い越せで、始めたって風にもなったんです。市立習志野高等学校という学校が、実は習志野の音楽にすごく影響をしてるんです。習志野では全国一位をとる学校が5、6校ありますが、必ずしも音楽大学の卒業生が棒を振っているわけではないんですよ。他教科の習志野高校の卒業生が戻ってきて、ここで指揮をやっている、教壇に立っているという。中学校が7校ありますけど、その中で音楽の先生が棒を振っている学校は2校くらい、あとは全部他教科の先生です」

(63) コンクールで勝ち進むと全国大会は12月頃になるため、受験を控えた3年生は引退できなくなる。嬉しいことだが半面、3年生には辛いことでもある。

(64) 『教育音楽』1977a, 21 (3), 30。

中学校でオーケストラを経験した生徒たちには、教師としてスクールオーケストラに携わる者もいれば、単に音楽を趣味とした者もいる。『未完成交響曲』を最初に指揮した生徒は、外国の指揮者コンクールで入賞し、現在はプロとして活躍しているとのことである。

3-7 各地域の状況と3 教師が去ってからの各校

銚子五中

五中学区に限らず高度経済成長期の銚子市は、中心部を除くと市全体が「音楽より野球」といった感が強かった。塚本は「野球と同じようにウワッと町中の人々が沸くような、そういうようなものにしたいです」と述べているが、黒潮打線と言われた銚子商業の活躍で、大部分の市民の関心は高校野球に向いていた。

塚本は1973（昭48）年に退職し顧問として残ったが、管弦楽部はその後吹奏楽部になった。塚本は1975（昭50）年に結成された銚子市民交響楽団の指揮者として、翌年3月「銚子市民交響楽団結成記念演奏会」で演奏を披露したが、1978（昭53）年の第3回定期演奏会を最後に退いた。この銚子市民交響楽団も1983（昭58）年以降休止し、現在の銚子市に市民オーケストラは無い。

郡山二中

郡山二中のオーケストラは、現在もコンク

ルで優秀な成績を収めている。阿部が去った後も、指導が他の先生によってうまく継続されたからである。郡山市は2008（平20）年に音楽都市宣言をし、「楽都郡山」を標榜している。阿部は「郡山の音楽の基礎は、最初は金透小学校のリード合奏、10年経って二中のオーケストラの全国一位、そして安積女子高校合唱部の全国優勝」⁽⁶⁵⁾だと語る。郡山市が位置する福島県は合唱王国と言われるが、「楽都郡山」誕生に二中のオーケストラが貢献したことは言うまでもない。

郡山市には1971（昭46）年、「郡山市民オーケストラ」⁽⁶⁶⁾が誕生した。演奏会には二中の生徒たちも出演したと阿部は語る。現在もメンバーの年齢層は幅広く、活動範囲は年2回の定期演奏会をはじめとして多岐にわたり、郡山の音楽文化の一助となっている。

習志野一中

1970（昭45）年、文教住宅都市憲章が制定され、1973（昭48）年には旧一中の跡地に習志野文化ホールが設立された。石橋はホール設立の意義を「文化ホールができたことで、習志野の子どもは必ず小学校の間に一回はこのホールのステージで演奏しよう、良い音楽をお互いに聴き合おう、というのが習志野の施策の中に予算も組んであるんです」と語る。

一方1978（昭53）年、石橋率いる習志野一中のオーケストラは、卒業生若干名を加えた

(65) 全日本合唱コンクール全国大会で35年連続優勝（1980–2014）、NHK全国音楽コンクール全国大会は9回優勝。

(66) 従来の「郡山市民合奏団」「郡山市民交響楽団」が合併した。

総勢 107 名の習志野少年少女オーケストラを編成して、第 4 回ウィーン青少年音楽祭に参加し第四位を受賞した。このオーケストラはその後新日本少年少女オーケストラに発展し、中国での演奏をはじめ国内でも演奏活動を続けることになった。

阿部、石橋は、当時は 3 校に加え森下元康氏指導の豊橋市立羽田中学校も、リード合奏で優れた演奏をしていたと語った。羽田中学校は創部一年後の 1962 (昭 37) 年に、「NHK 全国器楽合奏コンクール」中学校の部で一位を獲得した。森下と当時の部員たちは中学卒業後の受け皿として、1963 (昭 38) 年、OB 中心の市民オーケストラ「豊橋リードフィルハーモニー交響楽団⁽⁶⁷⁾」を設立、さらに 1972 (昭 47) 年には森下が中心となり、日本アマチュアオーケストラ連盟を設立した。

4. 考察——高度経済成長期のスクールオーケストラの役割

「もはや戦後ではない」と『経済白書』に記述されたのは 1956 (昭 31) 年であった。日本はその前年に高度経済成長期に突入していたが、一般的な生活世界は高度経済成長期前夜といった状態であった。そうした中、銚子五中にオーケストラが創られ、活動が始まった。その後「一億総中流」と言われる社会になると、リード合奏部からオーケストラに変わった郡山二中と習志野一中も活躍し始めた。

今回の調査から 3 校の事例は、当時のスクー

ルオーケストラ活動において特徴的な 3 種類のパターンを示していることが明らかになった。地域社会との関係性、楽器購入や技術指導などについては高度経済成長期ならではの問題も含まれてはいるが、一方でそれらは現代においても義務教育現場でオーケストラ活動を行う場合、程度の相違はあっても直面する問題でもある。次に、高度経済成長期のスクールオーケストラは、戦後日本の音楽文化を考えるうえで重要な位置づけにあることも確認された。戦前限られた層の文化であったクラシック音楽は、戦後受容者層を拡大していくが、背景には高度経済成長期のスクールオーケストラの存在もあった。

4-1 地域社会の中で

3 校のオーケストラが義務教育現場の部活動という性格上、地域社会との関係は無視できない。各々の立地背景は①市街地から離れた音楽文化に無縁な地域、②音楽文化に親和的な旧都市中間層の居住地域、③首都圏のベッドタウン化が進む新中間層の居住地域、というように全く異なり、人々の生活が大きく変化する高度経済成長期の都市発展の様相を呈していた。そのため各校の地域社会との関係は、この時代のスクールオーケストラを考察するうえで注目に値する。またスクールオーケストラの重要課題である技術指導は①一人のカリスマ教師がすべてを担う、②経済的裏付けのもとに外部に協力を依頼する、③教師と生徒が試行錯誤しながら行う、といった 3

(67) 現在は豊橋交響楽団。

種類のパターンを示していた。

4-1-1 高度経済成長期の終焉

銚子五中は一人のカリスマ教師が、文化に無縁な地域を変貌させた典型的な例である。戦後日本社会は核家族化が進み、親の子どもに対するまなざしは変化した。戦前子どもの教育に力を注げなかった親も子どもの教育に関心を向け、特にピアノ教育に象徴される音楽を中心とした情操教育に注目が集まった。しかしながら高度経済成長期とはいえ、1950年代後半でも地方社会は未だ経済成長を実感できる状態ではなかった。市の中心部から離れた五中学区ではなおさらであったろう。そうした中、塚本外太郎という一人の音楽教師が、第一次産業に従事している親が多く、家庭の音楽的雰囲気が乏しい地域に位置する五中に管弦楽部を創設し、その指導に携わった。

塚本は戦前音楽学校でバイオリンを専攻したため、義務教育現場でオーケストラを指導できる音楽教師が非常に少なかった当時でも、オーケストラの要である弦楽器の技術指導や模範演奏が可能であった。加えて塚本は楽器の購入にも奔走し、スクールオーケストラ活動のすべてを自ら一人で行った。その有様を一部始終目の当たりにしていた地域の人々にとり、塚本は尊敬すべき教師だった。部員だったHさんは「練習することが誇りだった。五中のオケは私の金字塔。就職してから先生が私のようなものを探して、バイクで職場まで来て、市民オケに入ってくれと言いに来てくれたことが嬉しかった。立派な先生に対する尊敬から先生を悪く言う人は誰もいなかった。

一コマ一コマの思い出の、どのシーンをとっても先生の人柄が伝わってくる」と述懐した。

当初塚本が感じていた五中学区は、文化的水準が低く子どもの教育に「音楽より珠算」を選択する地域だった。戦前は海上村と言ったこの地域に、塚本は土着の共同体的色彩を帯びた閉塞感を覚えていたのかもしれない。しかしながらその土着の共同体的意識は生徒たちの援助への一体感を呼び起こし、後年塚本が、「父母がほんとうに心から援助してくれた」と述べるほどに変化した。『銚子の昭和史』には、1969（昭44）年、総理大臣官邸に佐藤首相を訪問した際の記念写真が紹介され、そこには佐藤首相、塚本、生徒、そして父兄たちが写っている。こうしてみると高度経済成長期の銚子五中のスクールオーケストラは、塚本外太郎という一人のカリスマ教師が率いた、まさしく地域における啓蒙活動だった。と同時に、地域社会の閉塞感を打ち破る役割も持っていたと考えられる。Hさんが「コンクールで東京へ行ける」と思ったように、子どもたちにとっても狭い地域社会から外の世界を見せてくれる機能を持っていたのである。

高度経済成長期の始まりと共に創設された銚子五中のオーケストラは、塚本の退職により、その後吹奏楽に変わった。まさに戦後日本の高度経済成長と歩みを共にしたスクールオーケストラだった。

4-1-2 高度経済成長期から現代へ

リード合奏部として古い歴史があった郡山二中と習志野一中は、1970年代になると優れたオーケストラ活動を展開し、それは今も続

いている。郡山市と習志野市は、現在「音楽都市」を宣言しているが、背景に両校のオーケストラがあることは言うまでもない。

中核都市の郡山市において、二中学区は従来から文化的意識も高い旧都市中間層の居住地域である。学校も生徒たちの家庭も経済的に恵まれ、オーケストラ活動は円滑に実践された。そうした環境にいた阿部は、対談で「音楽教師は学校音楽のすばらしさを地域にアピールすべき」と述べたように、スクールオーケストラの責務の一つは地域社会との連携であることを認識していた。それゆえ学校内での活動だけに終始せず、地域の音楽を啓蒙することは徹底的に行った。その結果二中のオーケストラは、地域の応援を得ることができた。加えて文化的意識が高い地域ゆえに、管弦楽部と直接関係が無くても心から応援してくれる地域住民や教師、他の指導者によって現在まで優れた演奏を継続することができた。

現在、郡山市は「楽都郡山」として様々な音楽の催し物を行っている。その背景には高度経済成長期以前から音楽活動の下地があったことに加え、阿部が郡山の音楽の基礎と語った市内の小中高等学校のオーケストラや合唱部の活躍があることは言うまでもない。特に二中のオーケストラは、在校生や卒業生がそのメンバーに加わるなど、市民オーケストラに大きく貢献してきた。郡山市民オーケストラは、現在の郡山市における音楽文化の一端

を支えていると言っても良く、二中のオーケストラは名門校として郡山市の音楽文化において大きな役割を演じている。

一方習志野市は、高度経済成長期以降飛躍的に発展を遂げた。都心まで電車で30分余りの、首都圏のベッドタウンとしての発展である。現在は文教住宅都市憲章の下で教育に力を注ぎ、市内の小中高等学校は音楽・スポーツなどで優秀な成績を収めている。⁽⁶⁸⁾

急速に発展する市の中学校に若くして赴任した石橋は、当初オーケストラの指導は生徒と一体の試行錯誤の連続だった。しかしながらその苦難や努力は、市長吉野孝との出会いにより大きな成果を上げた。吉野は、ハード・ソフト両面からまちづくりの集大成を行⁽⁶⁹⁾い、特に音楽教育には尽力して習志野市を教育・音楽・文化のまちへと育てた。

習志野市は、市面積は小さいが戦後人口は毎年増加し、軍郷から「音楽のまち」へと変貌した。その核になったのは一中のオーケストラであり、さらに言えば、一中に赴任した石橋と市長吉野孝との出会いであった。二人の出会いは市からの積極的な支援を導き出し、成果を上げ、「音楽のまち習志野」に連なった。習志野一中はスクールオーケストラ発祥の地と言われるが、現在の「音楽のまち習志野」の基礎は、高度経済成長期における石橋の指導による一中のオーケストラであると言っても良いだろう。

(68) 市立習志野高等学校吹奏楽部3年生による「習志野市小中音楽管楽器講座」も、市の音楽文化に大きく貢献している。

(69) 音響効果が優れた全国初の本格的パイプオルガンを装備した文化ホールの建設、文教住宅都市憲章の制定など。

ところでスクールオーケストラの生徒たちは、卒業後プロの音楽家になる者、アマチュアとして活動する者など様々である。市の音楽文化向上に力を注ぐ郡山市と習志野市では、その一助となっているのが市民オーケストラであり、メンバーにはスクールオーケストラの卒業生が多い。職場などのアマチュアオーケストラでも、スクールオーケストラの経験者は少なくない。こうした例は両市に限らず、現在音楽都市を宣言している他の地域でも同様であろう。

また現在活動しているアマチュアオーケストラには、日本アマチュアオーケストラ連盟に所属する団体と連盟に属さず独自に活動をする団体がある。この日本アマチュアオーケストラ連盟は、羽田中学校の指導者だった森下元康が、卒業生のために設立した市民オーケストラに端を発している。こうして見ると戦後普及したアマチュアオーケストラの原点は、高度経済成長期のスクールオーケストラであると言っても過言ではなく、スクールオーケストラは日本の音楽文化に大きく貢献したと言える。

4-2 ピアノ文化との類似点

オーケストラはクラシック音楽であり、明治以降クラシック音楽は西洋の“正統な芸術”として、「高級文化」という所与の地位を獲得して来た。現在オーケストラは広く社会に受容されているが、戦前は限られた階層の文化

であり、その受容者層は高等教育機関に属する男子学生たちであった。一方戦前の都市中間層家庭の女生徒たちに受容されたのがピアノであり、ピアノ文化もまた「高級文化」であるクラシック音楽だった。

「高級文化」であるクラシック音楽は、戦後高度経済成長期になると受容者層が拡大した。ピアノ文化の受容者層拡大に直結したのは、高度経済成長期の「ヤマハ音楽教室」に代表される“民間の音楽教室”（以下音楽教室）である。それに対しオーケストラの普及は、同時期に義務教育の学校現場で実践されたスクールオーケストラが、その誘因になったと考えられる。オーケストラはピアノ文化とは全く別なルートで普及したが、普及の様相にはピアノ文化と重なるものがある。⁽⁷⁰⁾

高度経済成長期の音楽教室の意義は、教室の全国展開により、戦前は都市中間層の文化であったピアノ文化が、階層や才能、地域の制限無く普及したことである。同様にこの時期のスクールオーケストラの意義も、義務教育現場でスクールオーケストラが実践されたことで、従来特権階級の音楽であったオーケストラが一般の子どもたちに開放されたことである。「家庭において音楽的雰囲気は薄く、音楽文化に接する機会の少ない生徒たち」や、「個人レッスンについてしたことなどない、全く普通の家庭の子どもたち」など、戦前の日本では決してオーケストラに参加することはなかった子どもたちでも、オーケストラに参加する

(70) 筆者は2016年度、慶應義塾大学社会学研究科博士論文「日本におけるクラシック音楽文化の社会学的研究——ピアノ文化を中心として」において、日本のピアノ文化普及の様相を明らかにした。
<http://koara.lib.keio.ac.jp>

ことができた。また参加せずとも、スクールオーケストラを通して子どもたちが生のオーケストラ演奏を聴く機会も増加した。スクールオーケストラによって、弦楽器と管楽器で演奏される音楽が全国の子どもたちに認知された。高度経済成長期における音楽教室とスクールオーケストラは、戦後、「高級文化」であるクラシック音楽の普及拡大に大きく貢献したと考えられる。

一方音楽教室とスクールオーケストラは音楽リテラシーの獲得にも寄与した。塚本は「特集 小学校の音楽教育に何を期待するか」⁽⁷¹⁾において、音楽教師として生徒の基礎的音楽リテラシーが欠如していることを指摘し、中学校の音楽指導の中心は読譜力をつけることと述べている。特集には他の教師も寄稿しており、その内容は「音符を読んでそれを表現する能力」「記譜能力を身につけること」「音感を充分身につけること」など、当時の一般中学生の基礎的音楽リテラシーの欠如を示すものとなっている。これは正課の音楽教育では音楽リテラシーの獲得が困難であることを意味している。

戦後日本の音楽教育は「器楽」を含めた総合教育が目標とされたが、現実には当時の教師に指導は困難であった。それゆえ学校による音楽教育の限界を予想したヤマハは音楽教室を創設し、演奏技術や音楽リテラシーを教授した。しかしながら学校外で音楽教室に通わずとも、学校で音楽の部活動を行った場合、音楽リテラシーは十分に獲得できた。塚本は音

楽の部活動をしている生徒と一般生徒では、3年生になると音楽的能力に極端な差がつくことを指摘している。スクールオーケストラは音楽リテラシーの獲得にも寄与したのである。

戦後日本社会では、人々は自ら参加して音楽体験を求めるようになった。特に趣味としてのクラシック音楽は、従来の聴取に加え演奏活動という形でも実践されている。この背景にはスクールオーケストラも音楽教室と同様に、その後の日本の音楽文化に影響を与える音楽リテラシーを人々に浸透させたことがある。音楽教室とスクールオーケストラによって、クラシック音楽は才能や地域的拘束を解消して全国に普及した。もちろんそれは音楽関連の部活動全般に言えることで、高度経済成長期の学校教育における音楽の部活動は、クラシック音楽の普及と音楽リテラシーの獲得に貢献した。スクールオーケストラはその大きな役割を担ったと考えられる。

4-3 階層との関連

戦後、ピアノ文化やオーケストラの受容者層を大衆レベルまでに拡大したのは、高度経済成長期における音楽教室とスクールオーケストラであった。しかしながら大衆化したとはいえ、ピアノの世帯普及率は1974（昭49）年になっても10.2%であり、普及率が20%に達したのは1989（平1）年になってからである（21.9%）。オルガン使用者も多数いたと思われるが、それでもピアノあるいはオルガンが購入できる家庭の子女以外はピアノ文化の受

(71) 『教育音楽』1976, 20 (10), 22-23。

容は困難であった。それに対しスクールオーケストラは学校という教育現場での活動であるため、参加は公平性が担保されているように考えられる。しかしながら3校の調査からは、高度経済成長期のスクールオーケストラの実情が浮かび上がってくる。しかもそれはこの時期のスクールオーケストラに限った状況ではなく、いつの時代もスクールオーケストラが抱える大きな問題の一つでもある。

元来スクールオーケストラは学校の活動であっても部活動であるため、学校の備品購入費で楽器をすべて揃えることは困難である。銚子五中の場合は音楽に関心が薄い地域のため、当初は個人で楽器を所有している例は無く、また個人購入を強いることも困難であった。それゆえ塚本が自ら楽器の購入に奔走し、市から楽器購入費を贈られたのは創部から14年後である。こうしたことから銚子五中のスクールオーケストラは、概ね平等に門戸が開かれていたと考えられる。

それに対し郡山二中は、阿部が「二中のオーケストラは、基本的に個人所有の楽器です」と語ったように、直ぐに楽器は個人購入となった。打楽器や大きな金管楽器は学校で揃えたと思われるが、学校として楽器の購入について苦心することは無かった。しかしながら視点を変えれば、個人購入が不可能である場合はオーケストラ活動への参加は困難になる。二中学区は比較的富裕層が居住するために問題は少なかったが、この事例は、公立中学校

のスクールオーケストラといえども生徒の出身階層との関連が否定できないことを示唆している。

郡山市における音楽と階層の関連は、市が2016(平28)年度に実施した調査「音楽都市の推進及び音楽堂の建設について」⁽⁷²⁾からも読み取れる。86.1%の人が音楽に関心はあるが(複数ジャンルの回答可)、その半数以上の関心は国内のポップスに向いている。市内の全国大会出場校の合奏、合唱によるコンサートを聴いたことがある人は13.6%、年に一回開催の、二中管弦楽部出身の指揮者本名徹二とプロのオーケストラによるコンサートを聴いたことがある人は10.4%である。調査には「音楽は関係者には浸透しているが、一般底辺には全然浸透していない」という意見もあり、音楽専用ホールの建設に対しては、57.3%が必要無いと答えている。市の音楽関係者と一般市民の音楽に対する温度差が窺われる。

一方習志野一中的場合は「個人持ちの楽器というのは、ほとんど無かった」と石橋が語ったように、楽器はすべて学校の備品であった。当時の市長が積極的に支援したゆえである。そのため生徒たちには平等な機会が与えられる。スクールオーケストラとして理想的な展開であるが、すべての学校がこうした支援を受けるのは不可能である。コンクールなどで良い成績を収めた学校が優先的になるだろう。ただその場合、「良い成績をとって当たり前」という状況に陥ることもあり、活動が教師や

(72) モニター数 328 名、回答者数 281 名。

<https://city.koriyama.fukusuima.jp/063000/kocho/documents/web7.pdf> (2018/3/18)

生徒の負担の一つにもなりかねない。

楽器購入に関する問題は、スクールオーケストラが直面する問題の一つでもある。現実には楽器をすべて学校が揃えるのは不可能であり、その一方で楽器の個人購入が困難な生徒も存在する。そうした生徒は活動への参加を断念せざるを得ず、その意味においてはスクールオーケストラも階層との関連を否定できない。現在は公立学校でも部活動の管弦楽、吹奏楽では、楽器は個人購入が多い。公立といえども部活動は課外活動であるため、担当楽器の個人購入は当然、という意見が多数ある⁽⁷³⁾。ただ楽器が個人購入の場合は、卒業後も楽器演奏を一生の趣味とすることができる。ちなみに現在の習志野一中は、バイオリンはほとんどが個人購入で、卒業後も継続して演奏を楽しむ者が多いようである。運動部では、野球のグローブやサッカーシューズなどは各自で購入する。部活動の楽器の個人所有をどのように捉えるかは、個々の家庭の考え方に依る。

4-4 スクールオーケストラに託した望み

高度経済成長期の音楽教室とスクールオーケストラは、同様の機能を担ったとは言っても両者には明確な相違点があり、それがスクールオーケストラの重要な目的である。

音楽教室は技術指導を旨とし、教室で仲間と学んだとしてもピアノは基本的に一人で学ぶ家庭主体の音楽教育である。また楽器メーカーの商業活動の一環として繰り広げられた

音楽教育である。しかしながらスクールオーケストラは、学校という教育現場で実践された活動で、決して企業の商業活動の一部ではない。1947(昭22)年の学習指導要領(試案)では、スクールオーケストラのような活動は自由研究とされ、それは「学年の区別を去って、同好のものが集まって、教師の指導とともに、上級生の指導もなされ、いっしょになって、その学習を進める組織……たとえば、音楽クラブ、……スポーツクラブといった組織による活動」と記されている。すなわちスクールオーケストラは、共通の目標を持ち、責任感や連帯感を養い、好ましい人間関係の形成を望む、技術習得以外の教育的効果も期待される活動なのである。

3校の教師は、スクールオーケストラにおける教育的側面の指導に心を尽くしていた。鉾子五中の塚本は、何よりも音楽文化に接する機会の少ない生徒たちに演奏する楽しさと喜びを与えたかった。さらに3年間の厳しい練習を乗り越えた自信が、生徒の将来にとってプラスになってくれることを強く望んだ。一方生徒は厳しい練習の結果、自分たちと先生の手で「夢にも見ていた第一位の栄冠」を獲得したことで、一つのことを成し遂げた自信が将来役立つことを学んだ。

郡山二中の阿部は、「管弦楽の編成は、非常に普遍性の高い合奏形態」と述べたように、本物の音楽を演奏すること、生涯を通して音楽をやることで、生徒たちが豊かな人生を送ることを願った。そうした思いは、自身が語っ

(73) <http://komachi.yomiuri.co.jp/t/2008/0529/186151.htm> (2018/3/14)

た「優れた音楽は優れた指導性を持つ」という言葉に凝縮されている。阿部はスクールオーケストラを通して、生徒たちが西欧近代の音楽が持つ教育的価値を人間形成の一助にすることを望んだのである。

習志野一中の石橋は、他の2校とは少々異なった生徒との関係を築いた。石橋が3人の指導者の中で最も若かったゆえであろう。『未完成交響曲』をめぐるエピソードで、その初演の指揮台に立ったのが生徒だったことも、一中ならではの教師と生徒の関係であろう。石橋が生徒たちに望むことは、二度とない青春を無駄にせず、逆境に打ち勝つ強い精神力、仲間と一緒に支え合う強い絆を養ってくれることだった。石橋は生徒と一緒に喜び泣いたが、生徒に対する視線は教育者であった。

一方3校の指導者は、音楽に対する芸術性の追求にも熱い思いがあった。それは3校が優れた演奏を披露したことからも明らかである。例えば塚本は、「管と弦がいっしょになって演奏すればオーケストラの音だというのはない」として、切れの良い澄んだ音を出せるよううるさいほど注意し、管と弦が融合された最上級のオーケストラの音を求めた。銚子五中を見学した阿部が「塚本先生はバイオリンを弾くが、管楽器の指導も徹底していた」と語ったほどである。

阿部は、他校の追従ではない「二中の音楽を創る」ことを目標とした。そのために基礎的技術は専門家に指導を依頼したが、曲想など楽曲の指導は自身で行った。作曲者が楽譜に込めた思いを読み込み、それを生徒たちの演奏で伝えることが二中の音楽であった。

石橋は声楽科出身であるがゆえに、個々の楽器の技術指導には苦心した。しかしながら楽曲指導に関しては、塚本、阿部に勝るとも劣らなかった。音楽はすべて歌うことであり、人間の感情を声という楽器で表現するか、弦や管の楽器を使って表現するかの違いだけで、「音楽の基本は歌」だからである。石橋が生徒たちに求める芸術的な要求度が非常に高かったことは、想像に難くない。

3人の指導者はスクールオーケストラを単に学校の部活動として捉え、教育的見地からのみ指導していたわけではない。またプロの音楽家育成を目指し、芸術的見地からのみ指導していたわけでもない。教育者として二つの立場を乖離させることなく、生徒たちの音楽を追求した。阿部が「管弦楽は世界の名曲を演奏でき、そうしたことで必ず人は育つ。優れた音楽作品は、それ自体が優れた指導性を持つ」と語ったように、3人の指導者にとって、教育的側面と芸術的側面の融合こそがスクールオーケストラの重要な意味であり、目的であった。教育的側面と芸術的側面を両立させて、生徒たちが人間として成長するための糧となる3年間を送ってもらいたい、という願いが3人の根底にあった。

5. おわりに

本稿は、高度経済成長期におけるスクールオーケストラに焦点を当て考察を行った。3校の事例に即して明らかになったことは、第一に、3校のスクールオーケストラは、オーケストラに対する日本人の潜在的な憧れ、ある

いは当該地区の西洋文化への親和性を背景に、音楽を通して教育的側面と芸術的側面の融合を実践しようとした教師の働きかけと、それに応えようとする子どもたちの努力とが結実した活動だったことである。第二に、そうした演奏活動を実現させた要因として、オーケストラの音楽教育に熱意を持つ個性的な教師の存在と、それに呼応したオーケストラのメンバーである生徒との関係、さらに両者を支えた地域社会の文化があった。それらを可能にした条件は、地域有志の協力、父兄の物心両面での支援、1950-60年代の中学校教育の個性発揮の余地などであったと思われる。第三に、高度経済成長期のスクールオーケストラは生徒の音楽リテラシー獲得に貢献し、今日の日本におけるアマチュアオーケストラ活況のさきがけ的位置にあったことも確認された。

様々な思いが込められた生徒たちの演奏は、今日ほど豊かではなく生のオーケストラ演奏を聴く機会に恵まれなかった高度経済成長期の日本社会において、地域の人々を感動させたことは想像に難くない。生徒たちにとっても、中学3年間を通しての仲間との絆や音楽経験は、その後の人生を豊かなものにしたと思われる。

事例とした3校のうち、2校は現在も継続して優れた演奏活動を行っているが、1校は当時の活動を記憶する者も少なくなった。こうした状況に対しては、当該校の問題のみならず地域社会の文化的環境をも視野に入れて検討することが不可欠である。本稿は、高度経済成長期のスクールオーケストラ活動に収斂したため、そうした論点を扱うことができなかった。今後の課題としたい。